

7 建築現場-3 野丁場作業



A 内装仕上げ業。下地の石膏ボードに岩綿吸音板(石綿入り)を接着剤+ガンタッカー(ホッチキスを大きくしたもの)で留めます。壁周り、照明周りの形に合わせてボードを切り抜く作業は多いです。



B 切断実験です。集じん鋸(回転刃の後ろに袋があり吸引する)をつけていないと写真のような状況になります。集じん鋸のない時代は、このような作業環境であったと思われます。



C 高圧除染作業。まともを受けると手が切れてしまうほどの高圧力をかけて汚れ部分を落とします。外壁の塗料には種類によっては石綿混入のものがあり、壁が劣化していれば水圧で削られ石綿含有の粉じんが大気中へ飛散した可能性があります。



D 石綿ケイカル板を開削して設備器具を付けるところです。断面の繊維がささくれだっており、このような断面から繊維が飛散し作業者がばく露した可能性があります。



E グラスウール(ガラス綿/ノンアス)張り工事。機械室の吸音・断熱に吹きつけ石綿にとって代わった工事。石綿除去後に施工するのですが、稀に石綿の上から直接張ってあった現場があり、壁の修理補修時に業者が知らずにばく露する危険があります。



F 建築現場はとて”ほこり”の多い作業環境です。多くの現場で5S運動(整理・整頓・清掃・清潔・躰)が展開されていますが、作業中だけでなく、このような作業後の清掃時にもばく露する可能性があります。

※掲載した写真はイメージ写真です

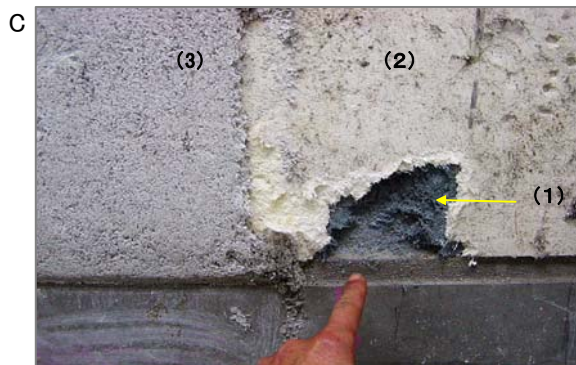
7 建築現場-4 (リフォーム)



リフォームの主な壁紙の張替え(クロス工)。下地調整が最重要でパテ(目止め)で何回もしごきます。昔はこのパテに石綿混和材が、またごく一部ですが壁紙にも混入されていました。



床の石綿含有ビニル床タイルは重歩行度や温湿度、経年などで劣化(剥れ、浮き、磨耗など)します。この黒い接着剤にも石綿は混入しています。張替えはこの接着剤をキレイにサンダー掛しますが、その際に石綿にばく露する可能性があります。



← (Cの説明)機械室の壁。
非常に珍しいケースですが、(1)青石綿の上に(2)白石綿を吹きつけ、更に(3)岩綿が吹きつけられています。壁の電気盤をはずしてわかりました。これは(2)の石綿対策として封込め工法(3)をやったものです。こうなると表面からの目視だけでは一概に判定出来ない、ということになります。

このような構造となっていることを知らずに、壁の修理、補修をしたり、解体をすれば、作業者がばく露する可能性があります。



屋上での修理作業。屋根材に石綿が含有していることもあり、漏水箇所を切り開いて修理する際に石綿が飛散することがあります。写真はアスファルトフェルトの補修作業(一部、石綿含有品あり)。



①昭和30年代のアスファルト工事(昭和60年頃まで)。アスファルト(石炭副産物・コールタール)の塊をフネ(鉄板の桶)に入れ、下から溶けるまで熱します。アスファルトに石綿を混ぜた時期があったようです。①から③の順で作業が行われます。



②昭和30年代の屋根の防水工事。アスファルトフェルト(巻物)を押し広げ、重なり部分に解かしたアスファルト(増粘剤として石綿を混ぜることあり)を流し込みます。非常に“熱い作業”なので石綿製の手袋等を使用することもありました。



③最後のタールを上塗りしているところ。打ち粉として微少な石綿をふっていたかもしれませんが確認できていません。このあとの時代は、石綿とは関連のないシート防水が主流になりました。